

とつて眞の祖国でありつづけるが、ネルヴィル卿にとつての祖国にはなりえなかった。かれにとつて「あまりに開放的で芸術と文芸を愛し、国の分裂によつて政治的関心をもたないカトリックの人民は理解に苦しむ」<sup>(24)</sup>からだ。

とはいえ、コリンナが女性の権利と自由の賛美の名のもとに、イギリスを単に非難すると考えれば見誤ることになる。女性についてさえも、基本的にスタール夫人はイギリスに対しては好意的評価をもちつづけたからである。『文学について』で、すでにこう述べていた。「イギリスは、世界中で女性たちが真にもっとも愛されている国である」<sup>(25)</sup>。そうして彼女はイギリス小説のふしぎな魅力を解説する。自身の才能とイギリス人男性（とりわけ世評にがんじがらめのオズワルドの）氣質とのズレから生じたヒロインの不幸がいかにひどくあつても、先の評価はコリンナのなかで否定はされない。コリンナ自身が切望する「深く長くつづく感情」<sup>(26)</sup>をもたらし、またフランス的社交性の負の側面である皮肉と悪口から女性をまもる。このようなイギリス習俗は、ある程度までは女性をまもるのである。さらにいえば、スタール夫人は『ドイツ論』の有名な一節で「イギリス的」観点から一種のメランコリックな眞実を認めたものの、女性の権利の擁護が彼女の最後結論であつたかは定かではない。「政治や世俗にかんする事柄から女性を締め出すのには一理ある。男性と張り合うことほど女性の生来の適性に反するものではなく、女性にとつては、栄光そのものは失われた幸福の鮮やかな喪服にしかないえないだろう」<sup>(27)</sup>。

他方で、イタリアはフランスのような虚栄心が蔓延することなく貴族社会の優美と美が花ひらいた国である。だが、イタリアの独自の役割をもつてしても現実の選択肢となるには決め手に欠くだけにいっそうイギリスの長所は重要でありつづける。『コリンナ』全体がイタリアの、イタリア諸都市の、その